

---

 書 評・紹 介
 

---

馮文猛著

## 『中国の人口移動と社会的現実』

東信堂, 2009年3月, 229p

筆者は中国人民大学社会学系(学部)を卒業後、2000年より東京農工大学に在席、2009年同大学で博士号を取得し、現在は、中国発展研究基金会(北京)で活躍されている。第1～3章では人口移動に関する理論的な分析枠組みが整理されており、第4～10章ではいずれも2006年に提出された博士論文を下地に、その後行われた調査結果が追加されている。

中国の国内人口移動は、中華人民共和国成立前後から劇的に変動が繰り返されているが、本書の主な分析対象は、1980年代以降展開されてきた市場経済の導入等をともなう経済制度改革と同時に進行している近年の動向である。

中国における近年の人口移動は、従来の諸理論に沿った傾向を示しながらも中国特有の制度である戸籍(戸口)によって規制されている。これらの状況を踏まえたうえで、著者は中国独自の移動メカニズムの解明を試みている。具体的には、中国における現在の人口移動は主として、経済状況の改善を目指す農村地域の余剰労働力が自身の社会的ネットワークを利用して大都市に流入する現象であり、この過程において社会的ネットワークと戸籍制度の改革がプラス要因として、地域間距離がマイナス要因として影響を及ぼしているとする。さらに、社会的ネットワークとは、第一に家族を中心としたもの、次に大都市で新たに構築されるものであり、前者は転入のきっかけとして、後者は大都市転入後における社会階層(この定義や中国の実態について詳しい記載はないが)の上昇を果たすうえで重要な役割を担っていると指摘する。同じ大都市でも、北京市と上海市を目指す農村出身者の動機や就業状況には若干の差異がみられることも明らかにしている。中国では大規模な人口移動によって若者を大都市に送り出す農村において様々な問題が顕在化し始めているが、著者は四川省を例にこの重要な課題についても取り上げている。残された世帯の経済状態、老親介護におけるきょうだい間の役割分担やジェンダーの特徴、子どもへの影響等を心理的および社会的側面から分析をおこなっている。

これらの結論は著者自らが中国の各地において実施した現地調査の結果をもとに導き出されている。今日中国において海外の研究者が独力で社会問題に関する実地調査、とりわけ住民に対するアンケート調査等を行うことがきわめて難しい実情を鑑みると、中国の三大都市圏(北京、上海、広東)および9000万人という巨大な人口をかかえる四川省において、それぞれ数百単位の世帯実態を捉えたこの調査結果自体に、資料的価値があると評者は考える。しかしながら、1億人をはるかに超えるとされる中国全体の人口移動の実態を定量的に明示するには、全体で数千人対象のアンケート調査では限界があることも事実である。調査結果の正確な解釈には冷静な分析力と十分な周辺知識が必要であろう。ただし、著者自身の中国での実体験と深い知識、ならびに質的事例調査の実施が、結果の解釈に係るこれらの課題を補うに十分だと評者は実感する。

それでもなお、中国の人口移動の実態を把握することは難しい。今後の課題をいくつか考えてみたい。まず統計上の問題である。人口移動という指標はそもそも人口統計のなかでも定義が難しい。地理的境界やどの時点で移動が発生したとみなすかといった取り決めによって数値が大きく変わる。中国ではわが国の国勢調査に相当する人口センサスが全国の人口移動の実態を把握するための重要な資料であるが、利用できる調査は1982年、1990年、2000年と少ない。さらにこれらの調査ではすべて人口移動の定義が異なっており、厳密な時系列比較ができない。他方、中国では戸籍制度によって人口移動が規制されていることから、地域による制度内容の違いやその変更によって実際の人口移動の動向に突発的な転換が起こっている。戸籍制度改革に関しては第2章で詳しく解説がなされており、大変参考になるが、今後の制度変更の方向性については予測が難しい。中国では人口移動の増大にともない計画生育(いわゆる一人っ子政策を含む)や住宅、教育や介護等のさまざまな分野において新しい問題が発生している。

人口移動と他の社会経済問題との相互の関係、中国を取り巻く国際人口移動の状況、中国の人口研究において人口移動分析の重要性はますます高まっている。(佐々井 司)